



教育学部生の
金融提案が
日銀を
動かした！

日 銀が大学生を対象に実施した金融経済の小論文とプレゼンテーションのコンテスト「日銀グランプリ」キャンパスからの提言2006」で優秀賞を受賞した香川大学チーム。実はこの3人、教育学部の学生たちなのです。東京大学や早稲田大学などをおさえて受賞した、その内容とは？

Q この「日銀グランプリ」キャンパスからの提言2006」に応募しようとしたきっかけは？

小山 私は卒論に「起業家教育」というテーマを選び、経済にも興味がありました。その関係で教育学部の植田先生から、このグランプリに参加してみないかと声をかけていただきました。グランプリが3人1組ということだったので、社会科学教育ゼミの参考になると思い、後輩の二人に声をかけました。



久保田 僕たち二人とも金融については知識もなかったのですが、これから社会科を教える上で役に立つと思って参加しました。

Q 作品の内容は？

小山 まず金融に関する10の用語を取り上げて、それぞれ説明できるかできないかを、学内で172名分のアンケートを取りました。アンケートの結果、やはり知らない用語が多かったです。それが原因で金融に興味を持っていないのではないかと考え、テーマを「教育から考える若者の金融力育成」難しい金融か

ら知りたい金融へ」と決めました。それから、出前授業や銀行見学など、金融教育を充実させるための具体的な7つの提案を挙げ、さらに結論として、お金に支配されない心の教育も必要だという点を加えました。

久保田 グランプリのテーマが「突破口を探せ！私たちが考える日本の“金融力”向上作戦」ということでした。そこで、最初は教育学部の私たちがどのような視点で取り組むか、という点でも悩み、「経済を専門としない、教育学部生だからこそできることは何か」と話し合いました。



Q 決勝に進んだ時の気持ちはどうでしたか？

鈴木 決勝に残った5チームのうち、教育学部は私たちだけでした。実際に自分たちで金融教育指定校の見学をしたり、銀行見学に行ったりして、「教育学部生として、教育現場で実際に生かせる提言をしよう」という狙いで提案することができたので、他とは違う視点が評価されたのではないかと思います。

ティションするのですが、3人で分担して行いました。3人ともプレゼンなんてしたことがありません。決勝進出は嬉しかったです。プレゼンどうしよう！と焦りましたね(笑)。

Q 決勝ではどうでしたか？

小山 他大学のチームは経済を専門的に学んでいる学部ばかりなのでテーマも専門的で、おまけにプレゼン慣れしているな、と思いました。でも私たちは教育学部なので、教壇に立つために、わかりやすく大きな声で、笑顔で話す訓練はできている。その点を生かそうと思いました。

鈴木 決勝は3月10日でしたが、その前日に日銀の量的緩和の解除がニュースになっていたもので、いつもより興味深くニュースを見ました。木村前学長や教育学部の植田先生、後藤前係長が会場まで応援に来てくださり、その他にもたくさんの方から応援のメールや電話をいただいた、とても力になりました。



Q 今回のコンテストに参加しての感想は？

小山 私たちが出した7つの提案を、これから教育現場で実践していきたいと思っています。実はその中で挙げた「日銀ホームページの改善案」という項目をすぐ採用していただいて、「日銀キッズ」というページがリニューアルされていました。これはうれしかったですね。



久保田直寛

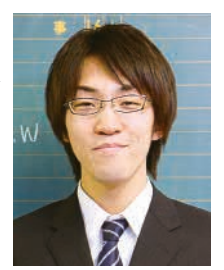
PROFILE

くぼた なおひろ
教育学部 学校教育教員養成課程
社会科研究室4年



小山沙織

こやま さおり
香川大学大学院 教育学研究科1年



鈴木孝迪

すずき たかみち
教育学部 学校教育教員養成課程
社会科研究室4年

鈴木 社会科教員を目指す学生として、金融だけでなく法律や、心の問題など、さまざまな分野に興味を持つことが大切だと思いました。これからのコンテストには、経済学部はもちろん、工学部など他分野から参加すればおもしろいと思います。

久保田 プレゼン練習をする中で、自分の話し方の癖に気づかされたり、今までにない経験ができたことが、これから教壇に立つ上で役立つと思います。一つのことをきっかけに、他分野まで興味を広げることが大切だと感じました。



ひとりとりにいただいた賞状。
楯は、そのレプリカが、香川大学学長室に置かれる予定です。

KEYWORD

日銀グランプリ
～キャンパスからの提言2006～

日本銀行が今年度初めて開催した学生向け金融施策コンテスト。「突破口を探せ！私たちが考える日本の“金融力”向上作戦」をテーマに、全国の大学から49件の応募があった。書類審査を経て決勝に進んだのは香川大学教育学部、京都大学経済学部、明治大学商学部、早稲田大学政治経済学部、東京大学経済学部の5チーム。最優秀賞は明治大学、優秀賞は香川大学と京都大学の各チームが選ばれた。

剣道部員として



石川さんは剣道二段の腕前。

石川一朗

PROFILE

石川 一朗
いしかわ いちろう
医学部6年

医学部生として



前

医学部剣道部主将。2004年には西日本医科学生総合体育大会の実行委員として剣道競技の責任者を務めた医学部6年生の石川さん。「医学部は、すぐ先に自分の職業が待っている場所です。学問を勉強しているというよりももちろんですが、直接仕事に結びつくことを学んでいるという感覚が強いですね」。彼の言葉から、等身大の医学部生の姿が見えてきました。

その勉強の合間で、石川さんが力を入れてきたのが部活の剣道。「そんなに強くないんですけど、小学生の時から15年くらい続けてます。テクニクより精神的な要素が大きい競技なんですよ。そこがおもしろいですね」。最も大きな出来事だったのは、2004年の西日本医科学生総合体育大会。西日本にある医学部のインカレと言える大会ですが、この年は香川県が会場でした。石川さんも実行委員に参加して、剣道競技の責任者という大役を全うしました。「大きな大会

法医学に興味があり、医学部に入学したそうなんです。入ってみて驚いたのは、医学が想像以上に科学的な分析に支えられたものであったこと。「医学とえば、患者と向き合って病気を治療していく、「コミュニケーション的な仕事というイメージがありましたけど、それらの土台には基礎的な研究がベースとして存在する。むしろサイエンスだったんです」。どちらにしても学ぶことは多く、またそれを完全に理解しなくてはならない学問。「本当に勉強は大変なことが多いですよ。それだけ

ですから大人の方とのやりとりが多くなります。話し方、書類の書き方...あとお酒のつぎ方も(笑)。社会のルールをたくさん学べました。閉鎖的な業界ですから、この経験は一生の糧になりそうです」。主将を先輩に託した現在も、週3回ほどの練習は欠かさないそう。道場に響く石川さんの声を聞いていると、日本の医療の未来は大丈夫という気持ちにさせられます。

に学生に一体感があります。おもしろいは試験対策委員というのが各学年にあって、進級に関わる試験の情報を共有できるようになっているんです。みんな一緒に上に行こうという意識が強いんですね」。それでも6年間のうちに5分の1ほどが留年してしまうという厳しい現実。「勉強のプレッシャーは正直大きいです。だから中途半端な気持ちで入学したら続かないんです。しっかりした目的意識がないとキツイと思いますよ。目的さえはつきりしていれば、仕事に必要なことを学

んでいるわけなので、積極的に勉強できるんです」。



道場に掛けてあった額。「自他共栄」という言葉が、医学の勉強にも通じます。